

# 県民交流広場

## 活用の手引き

地域の夢とやる気をかたちに！

兵庫の地域を  
もっと元気に



元気・安心のコミュニティ創造

県民交流広場

Community Innovation

Hyogo



平成18年4月  
兵庫県

# 元気で安心な 地域づくりをめざして



あいさつも少なかった隣人同士が、励まし合い、助け合った阪神・淡路大震災。私たちは、あの震災から、心の通いあう地域社会の大切さを学びました。

社会の成熟化や少子高齢化が進む今、身近な生活の場での人と人のつながり、それがもたらす知恵や温もりといったソフト面が、地域の貴重な資源として一層注目を集めるようになってきました。最近、住宅情報誌などで、まちの魅力としてコミュニティ活動を詳しく紹介する例も見受けられます。生活の豊かさや安心感は、コミュニティ活動の活発さと密接なつながりがある。そんな認識が広がるとともに、身近な地域でのリフレッシュや地域課題の解決に向けた活動へのニーズが高まっています。

県は、こうしたコミュニティへの期待をふまえ、従来、各地域においてCSR（カルチャー・スポーツ・レクリエーション）の拠点となる施設の整備を進めてきた法人県民税法人税割の超過課税を活用し、より身近な小学校区程度の単位で、みんなが集う『場づくり』と『活動』を応援する『県民交流広場事業』を平成18年度から本格実施します。

この事業が何よりもめざすのは、『参画と協働』によるコミュニティづくりです。さまざまな立場にある主体がきずなを育みながら、地域の課題やニーズに根ざしたコミュニティづくりに取り組まれることを期待しています。その呼び水となるのが県民交流広場の役割です。

2か年にわたって実施したモデル事業では、各地域の特性や実情に応じた創意工夫あふれる取り組みが展開されています。活動の回数や参加者が増えた、世代間の交流が深まったといった成果があらわれるなど、コミュニティづくりへの共感の輪が着実に広がっています。

県民交流広場がきっかけとなって、コミュニティづくりに参画する人々のネットワークが広がっていけば、何物にも代えがたい地域の財産—きずな、自信、誇り、愛着などが生まれることでしょう。そうした目に見えない財産こそが、地域の活力を育む原動力となり、兵庫の元気をつくります。

誰もがいきいきと暮らせる、元気で安心な地域づくりをめざし、県民交流広場を軸に、個人、団体を問わず、多様な主体がパートナーシップを築きながら、ともに歩んでいきましょう。

平成18年4月

兵庫県知事 井戸敏三

# CONTENTS 目次



高まるコミュニティへの期待と可能性	1
コミュニティと暮らし	1
コミュニティへの期待が高まっています	1
そんなコミュニティがいま、様々な課題を抱えています	3
コミュニティの現状をみてみましょう	3
コミュニティが一人ひとりの豊かな暮らしをつくれます	6
これからのコミュニティとは？	7
これからのコミュニティのかたち	7
県民交流広場つてなに？	10
「県民交流広場事業」とは	10
地域の力を結集するきっかけとしての「県民交流広場事業」	10
地域の元気と安心をつくる「県民交流広場」の3つの心得	11
県民交流広場がもたらしたもの	13
県民交流広場事業の利用ガイド	16
事業の財源	16
実施地域の採択期間	16
基本フレーム	16
事業の流れ	17
事業の推進体制	18
事業の詳細	19
県民交流広場事業に関連した支援制度	26
モデル事業の整備・活動などの事例	28
地域推進委員会の構成	28
活用された施設	28
施設整備の内容	30
活動プログラム	32

- 県民交流広場事業の立ち上げから運営まで ..... 36
  - 県民交流広場のプランづくり ..... 38
  - 中心となる住民組織づくり ..... 41
  - 施設の整備・運営 ..... 45
  - 活動プログラムの展開 ..... 50
  - 多様な主体との連携・協働 ..... 54
  - 目標達成度合いの点検と改善 ..... 56
  - プロセス横断の視点 ..... 58
- 地域コミュニティの担い手づくり ..... 59
  - 「掘り起こす」(発掘)のために一情報提供ときっかけづくりが必要 ..... 60
  - 「育て・活かす」(養成)のために一プロセス学習と実践体験を活用 ..... 65
  - 「つながる」(協働)のために一他の地域や、多様な主体との交流 ..... 68
- モデル地域インタビュー ..... 71
  - 丹波市春日町黒井モデル地区(16年度モデル事業採択) ..... 71
  - 神戸市北区大原・桂木モデル地区(17年度モデル事業採択) ..... 74
- 県民交流広場に関してよくある質問 ..... 77
- おわりに ..... 82
- 参考資料 ..... 83
  - 県民交流広場事業の実施経緯 ..... 83
  - 県民交流広場モデル地域の紹介 ..... 85
  - 地域づくり活動を支援する施策集 ..... 91
  - 県民交流広場事業のお問い合わせ先 ..... 103



# 高まるコミュニティへの期待と可能性

## コミュニティと暮らし

『日常のゴミは収集所まで持っていけば、役所が回収してくれる。子どもの教育は、学校と塾に任せればいい。店には安くて、いい商品があふれている。市場と行政がこんなに効率的な生活を提供してくれるのに、わずらわしい人間関係を伴う地域のコミュニティなど必要ない。』

少なからぬ皆さんが、コミュニティに対し、このような考えを抱いておられるかもしれません。しかし、一方で、いまのコミュニティのあり方に疑問を感じたり、コミュニティへの自分のかかわり方はこれでいいのだろうかと自問自答したりしている方もまた多いのではないのでしょうか。

生活の場であるコミュニティは、私たちが多くの時間を過ごす大切な場所です。人と人のきずなを強めながら、コミュニティで身近な課題の解決に取り組むことは、取りも直さず一人ひとりの生活の豊かさを高めていくことでもあります。

それは、単に寝に帰るだけ、家があるだけという場を、住民の共同作業によって、愛着の持てる「ふるさと」に変えていく過程と言えるのではないのでしょうか。

## コミュニティへの期待が高まっています

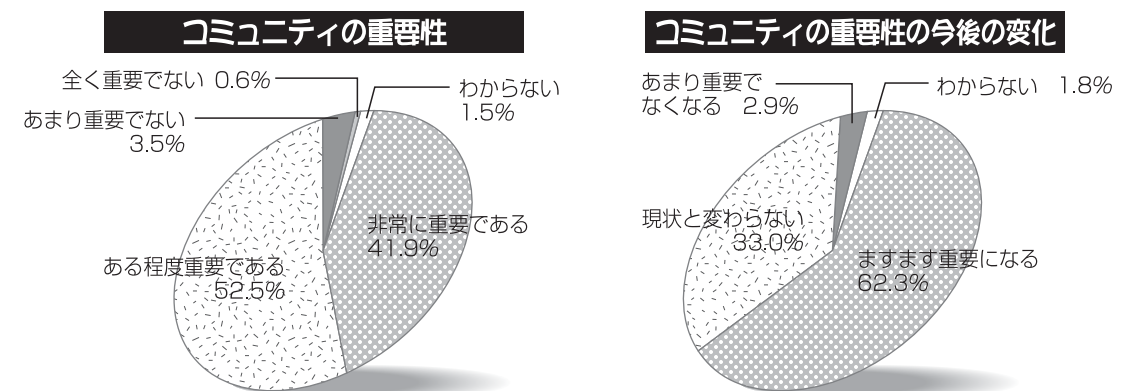
### \*暮らしの多様なニーズに応える地域協働の舞台\*

私たちは、阪神・淡路大震災の経験から、生活の安全・安心を確保するうえで、地域における人と人のつながりの大切さを学びました。

また、核家族化の進行に伴う、家族だけでは解決できない高齢者の世話や子育ての相互扶助、健康寿命の伸長に伴う退職後の生きがいづくり、地域の魅力や資源を生かした地域あげでの交流やにぎわいづくりなど、暮らしにおける多様なニーズに応える舞台として、コミュニティへの期待が高まっています。県民の皆さんや県内市町の多くも、コミュニティの役割が今後ますます高まると考えています。

### 人々はコミュニティの重要性と今後の変化をどうみているか？

～県民モニターアンケート調査(平成17年9月実施)～





コミュニティの重要性が高まる理由…

- 今後、少子高齢化が進み、お年寄りを地域で支えないと…
- 自然災害が増えるなかで、緊急の時はとなり近所が頼り…
- 核家族や単身世帯が増え、地域での助け合いや交流が大切に…

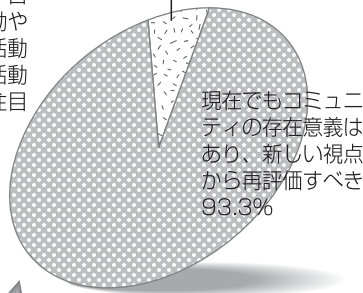
市町はコミュニティの意義と今後の重要性の変化をどうみているか？

～県民交流広場に関する市町アンケート調査(平成17年6月実施)～

コミュニティの意義

コミュニティの概念自体がもはや古く、NPO活動やボランティア活動のような市民活動組織の動きに注目すべき

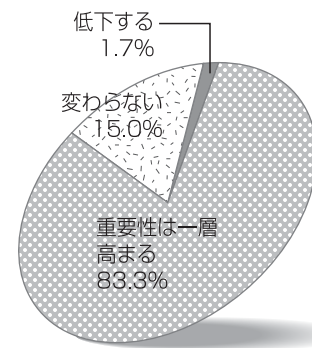
6.7%



現在でもコミュニティの存在意義はあり、新しい視点から再評価すべき

93.3%

コミュニティの重要性の今後の変化



低下する

1.7%

変わらない

15.0%

重要性は一層高まる

83.3%

新しい視点とは？

- 住民自治や住民の自主活動の基礎的単位としての視点 (63.8%)
- 公共サービス提供における行政との協働の視点 (24.1%)
- 地区単位の住民の相互扶助等セーフティネットの視点 (10.3%)

\*まがせる地域づくりから、ガガわる地域づくりへ\*

市町合併などの地方分権の新たな段階として、「自分たちのことを自分たちで行う」という「身近な自治」が大切になりつつあります。安全、教育、福祉、過疎など生活に身近な課題はまさにコミュニティで生まれています。その解決のためには暮らしを共にする人たちが心を通わしながら、取り組みの過程を共有していくことが求められます。

例えば、公園のゴミが目立つとき、「その清掃は行政の仕事」と片付けてしまうことは簡単です。しかし、「自分たちの公園をいつもきれいにしておこう」とコミュニティで相談し、実際に、公園でゴミを捨てない、見かけた人がゴミを片付ける、月に一度みんなで掃除するといった行動を起こすとともに、その過程で公園に対する愛着が育まれれば、行政に任せる以上に、本質的な問題解決につながるのではないのでしょうか。



そんなコミュニティがいま、様々な課題を抱えています

コミュニティへの期待が高まる一方で、効率優先の社会は、人と人のつながりを弱め、地域の共同体がやせてきています。

例えば、各地域のコミュニティに共通して、生活スタイルの個性化が進み、住民全体に共通する課題や関心を見いだすことがむずかしくなりました。世代や団体間の壁もあります。いわばコミュニティとしてのつながりが希薄化していると言えるでしょう。

また、中山間地域では、高齢化や過疎化によって、担い手そのものが不足する危機にあり、一方都市部では、人の流動性が増し、構成員の多様化、問題の広域化や複雑化が進んでいます。

こうした問題に対し、行政の対応力は財政難で低下しています。また、そもそも行政だけでは限界もあります。



コミュニティの現状をみてみましょう

「敵を知り、己を知らば百戦危うからず」…孫子の残した有名な言葉です。自分が暮らすコミュニティという「己」と、それを取り巻く情勢や状況というものを一度考えてみるというのはどうでしょうか。「現状？そんなものわかっている！」と思われるかもしれませんが、地域のことをじっくり考える機会というのは、あるようでないものです。自分が知らないこともたくさんあるはず。できれば何人がでワイワイいいながら、コミュニティを見つめ直すと、意外な発見があるのではないのでしょうか。

そのときに、「SWOT (スウォット) 分析」という手法をお勧めします。横文字で取っ付きにくい感じがしますが、企業が今後の取り組みを考えたりするときによく用いる手法で、意外に簡単に、かついろいろな分野で活用が可能です。

「SWOT」は、強み (Strength)、弱み (Weakness)、機会 (Opportunity)、脅威 (Threat) の頭文字を並べたもので、それら4つの切り口を、自らのこと (強み、弱み)、自らを取り巻く環境 (機会、脅威) の2軸で整理し、分析します。

次の表は、縦軸にコミュニティ内部の強みまたは弱み、横軸にコミュニティを取り巻く機会または脅威の要素を例示しています。まずは思いつくままに挙げていき、重複している場合は、後から整理していくのがよいと思われます。

こうした要素は、人によって見方が違います。例えば、高齢化は多様な経験や知恵を持った人が地域に増えるため、コミュニティにとってプラスとみる人、活力がなくなるのではと漠とした不安を感じる人など様々でしょう。いずれも高齢化の側面をとらえており、何がチャンスなのか、あるいは注意すべきことなのか、要は多面的に、そして地域の実情に即して具体的に確かめることが大切ということです。強みと弱みも同様に、潜在的なものを含め、地域の資源を洗いざらい、棚卸してみるとおもしろいでしょう。

SWOT分析の2軸4視点


<p>コミュニティの内部、外部の特徴的な動きや要素を、それぞれ2視点で整理</p> <p>今後の取り組みを整理</p>		コミュニティを取り巻く環境（外部）	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>●人口減少の進展</li> <li>●少子高齢化の進展</li> <li>●団塊の世代の地域還流</li> <li>●市町合併</li> <li>●市町のコミュニティ施策の状況</li> <li>●過疎化</li> <li>●地域で対処すべき課題の多様化・複雑化</li> <li>●近隣のコミュニティ活動の状況など…</li> </ul>	
<p>コミュニティ（内部）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●リーダーなど、活動を支える人材が豊富（いない）</li> <li>●活動への参加者数が増加（減少）</li> <li>●自治会などの地域団体への加入は順調（低調）</li> <li>●テーマごとのボランティア組織やグループなどで地域の課題に取り組む活動が活発（低調）</li> <li>●新旧住民の交流がある（ない）</li> <li>●世代間での交流がある（ない）</li> <li>●地域団体同士や地域団体とボランティアグループなど、団体間の連携は密接（疎遠）</li> <li>●最近、コミュニティで新しい取り組みがかなりある（あまりない）</li> <li>●コミュニティ活動を行うときの施設は十分整っている（不十分）</li> <li>●豊かな自然環境など誇れる資源がある（あまりない）</li> <li>●長年の活動で蓄積されたノウハウやアイデアがある（あまりない）</li> <li>●収益事業を手掛けている（いない）など…</li> </ul>	<p>機会</p> <p><b>積極的展開</b></p> <p>～強みと機会の相乗効果をねらって積極的な取り組みを行う</p>	<p>脅威</p> <p><b>差別化戦略</b></p> <p>～強みを生かして脅威を緩和する</p>	
	<p>強み</p> <p><b>段階的取り組み</b></p> <p>～追い風を生かしながら、段階的に弱みを克服していく</p>	<p>弱み</p> <p><b>危機回避</b></p> <p>～弱みと脅威で最悪の事態を招かないようにする</p>	

上の表の中で、縦軸と横軸の交わる場所に、今後の方向性を示しています。例えば、「積極的展開」の部分は、強みと追い風が重なり、コミュニティの「顔」となる取り組みです。弱みと脅威が交わる場所は、企業で言えば、撤退や縮小の対象となります。しかし、常にライバルと激しい競争をしている企業と異なり、コミュニティではこの枠に入る事柄について、消極にとらえる必要はありません。状況は変わります。可能

性を秘めた未完の利器として育てていくぐらいの受け止め方が適切と思われる。

次に簡単な事例を作成しましたので参考にしてください。SWOTなんてむずかしいと思われる場合は、強みと弱みを考えてみるだけでも意味があります。そこからコミュニティの現状と今後への足掛かりがみえてくるでしょう。

SWOT分析の例 ～大都市近郊のとある町の「ゆめ未来小学校区」

		コミュニティを取り巻く環境（外部）	
		<p>機会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●団塊世代がまもなく地域に還ってくる。</li> <li>●市町合併に伴い、縦割り補助金の包括化等が検討されている。</li> <li>●コミュニティセンターに指定管理者制度が導入されつつある。</li> <li>●貸し農園などグリーン・ツーリズムへの関心が高まっている。</li> </ul>	<p>脅威</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●市町合併で、「中心」から「周辺」になった。</li> <li>●行政改革で役所からの助成が減る傾向にある。</li> <li>●全体として、地域への帰属感が希薄化している。</li> </ul>
<p>コミュニティ（内部）</p> <p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●少数ではあるが危機感を持ってがんばっている地域リーダーがいる。</li> <li>●防犯活動と伝統行事である祭りは、長い歴史があり、ほとんどの住民がかかわっている。</li> <li>●最近、リサイクルとか、高齢者のケアとか、テーマ型の活動に取り組むグループができた。</li> <li>●大都市の近郊で、生活利便性と自然豊かな環境がうまく調和している。</li> </ul>	<p>機会</p> <p><b>積極的展開</b></p> <p>☆防犯活動をより充実し、もっと安心できる地域に！</p> <p>☆防犯活動と祭りを核にしつつも、コミュニティ包括補助金を生かせるよう活動の幅を拡大！</p> <p>☆団塊世代など特技、専門を生かす人材バンクをつくり、テーマ型活動グループとマッチング！</p>	<p>脅威</p> <p><b>差別化戦略</b></p> <p>☆街並みと自然・景観の維持活動を行い、誇りをもてるまちづくりを展開！</p> <p>☆伝統の祭りは、他地域からの集客を工夫し、にぎわいづくりにつなぐ！</p>	
	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●すぐ足の引っ張り合いになり、人が育たない。</li> <li>●外部の団体と連携しないなど、意識が閉鎖的。</li> <li>●コミュニティ活動への参加率が下がってきている。</li> <li>●新しいマンション住民と旧住民との交流が乏しい。</li> <li>●コミュニティセンターが老朽化し、規模が小さい。</li> <li>●恒常的に資金不足。</li> <li>●長い伝統がある農業が衰退傾向。</li> </ul>	<p>機会</p> <p><b>段階的取り組み</b></p> <p>☆人づくりと新旧住民交流を兼ね、新しいコミュニティ協議会を結成！</p> <p>☆指定管理者制度の導入を機に、県民交流広場でコミセンをリニューアル！</p> <p>☆都市近郊型貸農園を整備し、地域による収益事業の第1号に！</p>	<p>脅威</p> <p><b>危機回避</b></p> <p>☆関心を高め、参加の気運をつくり出すため、地域のよいところや課題をみつける「探検！発見！体験！運動」を、世代を超えて展開！</p> <p>☆NPOと連携し実験的に子育て支援を展開！</p> <p>☆様々な活動に会費制の導入を検討！</p>

# これからの コミュニティとは？



## コミュニティが一人ひとりの豊かな暮らしをつくります

「県民モニター調査」により平成17年に県民の皆さんにコミュニティ活動への参加状況を聞いたところ、「いつも参加している」は1割と少なく、「ときどき参加」が5割、「あまり参加していない」と「全く参加していない」を合わせて4割という結果でした。

自分の住む地域にはどんな人が住んでいて、どんな住民生活が送られているのか、行政の取り組みや対応はどうか、地域にどんな魅力や問題があるのか、そもそもこの地域はよそと比べてどうなのか、長く住んでいる場合でも、知らないことは意外に多いものです。子育てや仕事など、自分の生活に関心が向かいがちになるのも事実です。しかし、好奇心を持って見れば、地域は今までと違ったものに見えてくるはず。地域には、可能性も、問題も、たくさんあります。それは、そこに住む自分自身と直接かかわることだったりします。

まず、自分の周りを見渡してみてください。ここが「暮らし」の場所だと思えば、こうしたい、こうなってほしいということが、おぼろげにでも見えてくるのではないのでしょうか。そうなれば、活動したいことや生きがいを見つけるのは簡単です。経験を生かす、新しい領域への挑戦…。例えば、団塊の世代の方々は、間もなく仕事を離れ、地域に還ってきます。これまでは寝に帰ってくるだけの「パートタイム住民」でしたが、退職を機に「フルタイム住民」となる方も多いでしょう。そうした団塊の世代の方々のビジネス的センスや様々な経験は、コミュニティにとって大いに刺激になるかもしれません。

このように、コミュニティは、一人ひとりの生活を豊かにするための舞台でもあります。



## これからのコミュニティのかたち

コミュニティという言葉を知ると、濃密な近隣関係を軸としたかつての下町や村のイメージを思い浮かべる方がいるかもしれません。そうした半ば郷愁を誘うコミュニティに回帰することも、地域の選択肢の一つではありますが、現在の課題に対処したり、いまの人々が受け入れたりするコミュニティとなるのでしょうか。昔のコミュニティは、共同体としてはまとまっていたかもしれませんが、同時に因習や閉鎖性、息苦しさといった負の面を抱えており、今日のコミュニティ衰退の一因ともなりました。

同様に、コミュニティを理想化し、コミュニティを再生したら、どんな課題も解決できるかのようにみることにも問題があります。志を高くもつことは大事ですが、懐古主義やコミュニティへの根拠なき期待は、かえって問題点を見えなくしてしまう恐れがあります。

これからのコミュニティを考えると、地域社会がかつて持っていたよい点、例えば、相互の助け合い、地域のことはまず地域で話し合うという基本的な自治の精神などを学びつつも、時代に合った、そして自らの地域にふさわしいコミュニティの「かたち」を地域が主体的に描き、進化していくことが必要です。

その一助として、以下に、今日的な要請や課題に対応したコミュニティの方向性を示します。

### 自立したコミュニティ

コミュニティが抱える課題は、福祉から経済まで多岐にわたっています。加えて、行政も、きびしさを増す財政事情、市町合併による広域化などで、各種サービスの見直しや官から民への改革といった効率化を余儀なくされています。

こうしたなかで、コミュニティにおいても、「自分たちのことは自分たちでする」、すなわち身近な問題を自立して解決していくことが求められています。日常生活の場であるコミュニティは、様々な課題が発生する場でもあります。課題が生まれる現場で、当事者である住民が、一般論ではなく、実情に応じたもっともふさわしい解決策を地域の総意で見いだしていくという「身近な自治」の視点が大切になってきています。こうした自治の実践は、地域に暮らす住民が地域づくりや問題解決を担うという点で、「新しい公」をつくり出すことでもあります。

### 開かれたコミュニティ

地域のニーズや問題が複雑化する中で、地域に風を起こし、新しいことに取り組む力やエネルギーを外から吸収していく必要性が高まっています。今後も、住民同士の結束が大切であることはもちろんですが、例えば、県内でも、地縁団体である自治会と、特定のテーマで活動を行っているボランティアグループやNPO（非営利活動組

織)、研究者、専門家、さらに、地域貢献に取り組む企業や学校、医療機関、福祉施設などとコミュニティとの協働が次第に広がりつつあります。

コミュニティというと、地縁で結ばれた「同質の集団」というイメージがあり、NPOなど異質な相手と連携することに抵抗感があるかもしれません。しかし、現在のコミュニティでは、その構成員自体が、価値観はもちろん、生活スタイル、職業などあらゆる点で、既に異質な者の集合体であることを忘れてはなりません。

こうした現状からみれば、これからのコミュニティは、地縁的な関係性を基盤にしつつも、活動の質を高めていくため、「内」と「外」を区別することなく、様々な主体と手を結んでいくことが求められます。その多様な関係性の中で、知恵や力を分かち合いながら、互いに高め合う関係をつくっていく、そんな開かれたコミュニティが求められています。

### 地域を舞台に参画と協働を実践するコミュニティ

防犯パトロールをしたり、子どもの登下校を見守ったり、引きこもりがちな高齢者が外に出るための交流会をやったりと地域で取り組むべき課題は増えつつあります。しかし、一人で、あるいは少数の住民でできることには限界があります。

一方で、地域のために何かやりたいという気持ちは、程度の差こそあれ、多くの人を抱いていますが、その思いは行動に移されず、宙を漂っています。

大切なことは、できるだけ多くの人々の志を行動に変え、持続させていくことではないでしょうか。それには、一つひとつの“小さな思い”を、コミュニティ全体の意思へと昇華させる「プロセス」が重要になります。

兵庫県では、平成15年度から、自分たちの地域を住みやすくするために、知恵やアイデアを出し合いながら力を合わせる「参画と協働による兵庫づくり」を推進しており、そのための5つの要素として、「ともに知る」「ともに考える」「ともに取り組む」「ともに確かめる」「ともに支える」を掲げています。よりよい地域づくりのために、取り組み過程を重視していることが特徴です。

この5要素は、それ自体が目標になると同時に、自立し、開かれたコミュニティづくりのための具体的な取り組みでもあります。5要素を持続的に繰り返すことによって、参画と協働を実践するコミュニティづくりが進むことが期待されます。

